
約束

ハル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Zコード】

N1418Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

巧海と美咲の恋の物語。

2人の絆はメールのやりとりと電話だった。

ちょっとリアルな恋愛ストーリーです。
クライマックスをお楽しみに

出会い

オレはケータイを見ていた。

『おはよう。今田もお仕事頑張つてねー。タクちゃん大好きだよー。』

いつも決まった時間に美咲からメールが届く。

美咲はオレの彼女で5歳下の一十歳の大学生。オレ（巧海）は高校卒業してすぐに仕事に着き、今は仕事を覚えて早く一人前になる事を目標にしている。

『おはよう。行つてくる。美咲も勉強サボらず頑張れよ。』

オレはたまにしか返信しなかった。

けど美咲は暇があれば、つまらないことでもいちいちメールをしてきた。そしていつも最後には大好きだよ。と書いてあつた。

美咲とは友達の紹介で出会った。

初めて会つた時、美咲は花柄のシャツにショートパンツをはいていた。笑顔が可愛く仕草がとても幼かつた。とても二十歳には見えない可愛い女の子だった。

出会ったばかりの頃、オレはそれ程彼女が欲しいとは思っていなかった。作ろうと思えばすぐに作れる自信があったし、今は仕事が楽しくて仕方なかつた。

しかし美咲はどうしても彼氏が欲しかつたらしく、突然オレにこんな事を言つてきた。

『巧海君、お願ひ！！美咲の彼氏になつて！！』

突然の言葉にびっくりした。

オレは簡単な気持ちで付き合いたくなかったし、正直、女に振り回されるのが面倒臭かつた。

『じめん…。友達じゃあダメかなあ。』

オレは悩んでやんわり断つた。そして美咲は何でそんなに彼氏が欲しいのか分からなかつた。

しかし美咲は何度もオレにお願いをしてきた。

『お願い……。』

何度もこの会話が続いた。

そして、ついに…

『じゃあ…1ヶ月だけ…1ヶ月だけ美咲と付き合つて。イイ彼女で

いるからー。巧海君の邪魔はしない。1ヶ月したらいちやんといなくな
るから。お願いーーー！』

美咲は必死でお願いをしてきた。さすがに断り続けるのも可哀想にな
り、9月いっぱいの1ヶ月だけといつ約束で付き合ひ事になった。

美咲はオレと会った時からやたらと、カッコ良いだの、優しいだの、
ステキだのを連発していた。半分、「冗談だと思っていたが嫌な気分
にはならなかつた。女の作戦か?」とも思った。

こんな感じで2人はスタートをした。

付き合つた日から美咲からは毎日メールが来た。そして夜には電話
がかかつて來た。

『「こんばんはーーーねえーねえー、巧海君つて言い難いから…タク
ちゃんつて呼んでも良い?』

最初の電話つて感じのトークで話しかけて來た。

『好きに呼んでくれていいよ。』

年下の子と付き合つなんて初めてだつたから会話が恥ずかしかった。

『ありがとうタクちゃん！..美咲の事は美咲って呼んでいいから。』

『

『おう。』

電話も少し苦手だったから、オレは会話と書つよりはほとんど返事しかしていなかつた。美咲は今日の出来事や昔の話などを散々している。とても楽しく時間があつてこう間に過せた。

1時間ぐらい話しただらうか。

オレはだんだん眠くなつてしまつた。オレの返事が少し遅れだし、美咲に眠いのがバレた。

『ゴメンねー。眠いよね？明日もお仕事頑張つてねーおやすみつ』

『うふ。ありがとう。美咲もゆつべつ寝るよ。おやすみ。』

オレは電話を切つてすぐに寝た。

そして次の日の朝、メールが届いた。

『おはよう。昨日はありがとう！タクちゃんの声を聞いたら元気が出る。タクちゃん、お仕事頑張ってね！大好きだよ。』

彼女からって感じのメールにちょっと嬉しくなった。

『おはよう。頑張つてくる。美咲も勉強頑張れよ。』

普段はほとんど返信しないが、送つてみた。何だか恥ずかしかった。でも仕事を頑張ろうつて気分になれた。

仕事中も何通かメールが届いてた。

休憩の時に見たがウキウキした内容のメールで、見てるとアホらしくて笑つてしまつた。そして仕事が終わる頃にもメールが届いた。

『お仕事お疲れ様ー。よく頑張つたね。エライつ。お家に帰つてゆっくり休んでねー。タクちゃんすきー。』

…全然偉くないし。そう思いながらも美咲から来るメールはいつも明るくて元気になれた。そして自然と笑顔になつていった。

また夜になつて電話がかかつて來た。

『 ひよばんはー！..何してゐの？』

美咲の声は元気が良くて可愛かつた。

『 別に。何もしてないよ。』

オレは仕事に疲れてソファーでのんびりしながらテレビを見ていた。

『 ねえーねえー、4日のロ曜日つて空いてる？明後日なんだけど…』

彼氏が出来て嬉しいのか、美咲は早速トートに誘つて來た。

『 特に用事はないかな。』

『 じゃあ、美咲とトートしよう。』

可愛い声で言つてきた。

『 おう。別にイイけど。どこか行きたい所もあるの？』

『 行きたい所はいくぱいあるよーーー。』

電話の向こうで子どもみたいに美咲はしゃいでいる。

『 じゃあ、明日までに決めとこ。』

『うん！また明日電話かけるねー。』

嬉しそうにそう言つと美咲は電話を切つた。

「そんなにオレと付き合って嬉しいのだろうか…」

ふと思つた。でも美咲と付き合つて2日。オレも何だか少し変わつた様な気がした。

ケータイを見ながらニヤニヤしてるオレがいる。気が付くとケータイを手にしてるオレがいる。いつもならほとんど返さないのに不器用にケータイを打つているオレがいる…

そんな事を感じながら気が付くとソファーで寝ていた。

朝になりオレはいつもの様に仕事の準備をしている。朝はいつも、ギリギリに起きるから急いで支度をして家を飛び出る。会社までは車で10分程度。仕事が始まる20分前には着いていたい所だが、今日も10分前…

会社に着いた頃、美咲からメールが来た。

『おはようー。タクちゃん！行きたい所決めたよー。最初のデートはちょっと遠くまでドライブに行きたい！！運転してるカツコ良いタクちゃんが見たいなあー。今日もお仕事頑張つてね。タクちゃん大好きだよーん。』

絵文字がいっぱいのメールは女の子らしくてとても可愛かった。彼女を作るって良いもんだな…しばらく彼女がいないオレには新鮮だった。

『おはよう。わかった。また詳しく夜の電話で聞くわ。仕事行ってくる。』

ギリギリに職場に着いたから短い言葉で返信した。美咲からすぐにはまたメールが届いた。

『タクちゃんだ。メール返してくれてありがとう！えつ？！夜もまた電話していいのー？タクちゃんのカツコ良い声が聞けるつ！ありがとうーーーー！美咲、これで今日も一日頑張れるよーー！タクちゃん大好きっ』

読んでいると、仕事のチャイムがなり仕事が始まった。

オレも美咲からのメールで仕事を頑張る気持ちになった。

3日前と違うのは…休憩時間の過ごし方。オレはご飯を食べながらケータイを突いている。いつもならさつさと食べて寝ているが、今はメールを読んだり気が向けば返信したりしている。たいした内容ではないが、美咲からのメールは嬉しかった。ケータイの中には明るい美咲がいた。

夜になり電話がかかってきた。
ケータイはピンクに光っていた。

美咲だ！

オレは美咲からの電話やメールがわかる様に美咲だけ着信の色を変えた。サブディスプレイも美咲と表示されている。電話を取った。

『こんばんはーーー！』

美咲の明るい声がした。

『おう。美咲はいつも元気だねえ。』

最初よりも少し楽に話しが出来た。

『うん。だつてタクちゃんから夜電話してもイイって言つてくれたからーー！嬉しいの。』

美咲はちゅうと高めの声で、とても可愛にしゃべり方をする。

『そつか。美咲は単純だな。で、どこに行くか決めた?』
いつもの様にソファーに転がりながら言った。

『うん。でもね、美咲、行きたい所がいっぱいあり過ぎて困るー』

『ははは…どこに行きたいん?』

美咲の頭の中はデートの事で頭がいっぱいの様だった。

『ん~とねえ、遊園地も行きたいし、動物園も行きたいし、水族館
も行きたい!!後は…』

『美咲は子どもみたいだな。全部子どもが行きたいって言つ場所ば
かりじやん。』

二十歳の子が行きたいデートはそつまつ所なのだろうか。ふと思つ
た。

オレは外に出るデートはあまりした事がなかつた。
今までのデートと言えば…ご飯を食べに行つたり買い物に付き合つ
たりしたが、ほとんどはオレの家でゴロゴロしながらDVDを観て
過ごしていた。

『え~?そんな事ないよおー。カップルも多いしデートスポットじ
ゃん!~!』

美咲がブーブー言いながら言い返してきた。

『そつか。わかつた！できる限り一緒にに行こう？オレも今日の休みはなるべく予定入れずに空けておくから。』

はしゃいでいる美咲の声を聞いていると、オレも楽しくなって全部の場所を連れて行ってやりたくなつた。そんなに喜ぶなら、どこだって連れて行ってやるうと思つた。美咲の彼氏でいるのは今月だけだし美咲の事もっと知りたくなつた。

『……うん……ありがとう……でも……1ヶ月じゃ……行けないかあ……』

美咲は忘れていた約束を思い出したかの様に声のトーンが下がつた。さつきまでワイワイ話しをしていたのに急に美咲が落ち込んで、時々会話には静かな間があつた。

『ゴメン……でも、約束だつたし……今は美咲の彼氏なんだから明日は楽しもう？？』

……本当の事を言つただけなのに、いけなかつたのだろうか……オレには女の子の気持ちがよく分からなかつた。

美咲は本気で落ち込んでいる様だつた。

でもしじばらくすると電話からはまた明るい声が聞こえた。

『うん……

そうだね……まだ始まつたばかりだし、まだまだ先は長いし……』

またいつもの美咲に戻つた。
いや、無理に明るく振舞つっていたのかもしれない。

『で、明日はどうするの？水族館でも行ってみる？ちょっと離れてるからドライブにもなるし。』

オレは美咲が言つていたプランの中から選んだ。

『うん。あー明日が楽しみ過ぎて寝れるかなあー。起きたらカッコいいタクちゃんに会えるー。幸せー。』

また美咲ははしゃいでいた。

『翌日は朝から出でた。9時に家の近くへバス停で迷ひながら、ちゃんと寝るよ。』

『はあい！ タクちゃんもねつ！ おやすみー』

電話を切つた。

オレは電話でみせた美咲の寂しそうな声が気になつた。本当に嫌だつたのだらう。もつ約束の事はあまり触れないでおこつと思つた。

美咲とは出会った日しか会ってないから、明日で会うのは2回目。オレも美咲に会うのが楽しみだった。

オレはすっかり美咲のペースにのまれていた。

遅刻したらいけないとアラームをかけて寝た。

初デート

朝になりケータイがなつた。

…もう起きる時間か？…そう思いケータイを取つた。

昨日かけたアラームではなく美咲からのメールだった。

『タクちゃんおはよう。朝だよ！起きてーー今日は初デートだね！…楽しみっ！9時にコンビニで待ってるねー』

朝からハイテンションのメールが届いた。オレはアラームをかけた時間まで一度寝をしようか迷つたが、ギリギリになつてはいけないと支度をする事にした。

デートかあ…着て行く服も少し考えた。でも、結局Tシャツにデニムを合わせたいつもの格好になつた。

まだ暑いかな…9月に入つたばかりで外ではセミがうへうへ鳴いていた。

支度が終わり早めに家を出て車を走らせた。最近は誰もこの車に乗せていなかつたから、車内は少し散らかつていて。いらぬ荷物を後部座席に投げ込んだ。とりあえず助手席は大丈夫だ。

ちょっと早めにコンビニに着いた。

ふとコンビニの中をみると美咲らしき人がいた。一度しか会つてい

ないからなんとなくしか覚えていない。

向こうも気付いたのか、こっちに向かって歩いてくる。

『おはよー。タクちゃん……今日はよろしくお願ひしますっー。』

やつぱり美咲だった。

今日スカート姿で可愛かった。美咲は車に乗つて、持っていたカバンを膝の上に置きシートベルトをしめた。そしてコンビニで買ってくれていたジュースを渡してくれた。

『迎えに来てくれてありがとうございますっー。』

近くにいる美咲に少しじドキッとした。

水族館までは車で片道2時間ぐらいの所を選んだ。ドライブに行きたがつっていた美咲の要望に応えた。

車の中でも美咲は元気いっぱいいろいろな話しさした。会話はどんどん盛り上がり楽しかった。話の中でも美咲は結構ドジだという事が分かつた。笑える話しがいっぱいあった。

2時間のドライブも美咲と一緒にあつといつ間に経ち、すぐに目的地に着いた。

こここの水族館はまあまあ大きくて、色々なショーがしていると有名だった。

水族館の入口はお客さんの数は少なかつたが、中に入ると意外と多くてびっくりした。日曜日だし人が多いのは覚悟していた。家族

連れも多かつたがカツプルも目立っていた。

中に入つてすぐの所に大きな水槽が見えた。

美咲は水槽の中の魚を見つけると一直線に歩いて行き、『タクちゃん、これスゴイよー！』と言いながら喜んでいた。勝手に進んで行く美咲を見て、迷子になるといけないと思いオレは美咲の手をギュッと握った。

美咲は驚きながらこっちを振り返った。びっくりした顔の美咲はすぐ笑顔になり『ありがとう！嬉しい。』と繋いだ手を見た。

美咲に初めて触れた瞬間だった。

その後も2人は手を繋ぎながら館内を歩き色々な魚を見た。美咲はデジカメで写真を撮つたりワイワイはしゃいでいたが繋いだ手は離さなかつた。

この水族館の目玉であるショーやは、あまりの人の多さに見る事が出来そうになかった。しかし美咲は人が多くて全く見えないショーやの会場から出ようとしない。

『ショーやは残念だったな。こんなに多かつたら見れないよ。また今度来ればいいじゃん。』

オレはそう言つて繋いでいる手を引いた。すると突然、美咲がオレの手から離れた。下を向いて悲しそうにしている。

『嫌…』

子どもがタダをこねるみたいに美咲が言った。

『今度つて…

美咲達には今度は無いもん…！

今見なきや…次は無いもん…』

泣きそうな顔でこっちを見た。

オレはそんなつもりで言つたんじゃなかつた。何も考えずに言つた事を反省した。

オレはふと横をみるとお土産売り場が田に入つて來た。

『ゴメン…。

やつぱり…こんだけ人が多かつたらショーは見れないかもなあ…

でもショーは見れないけど、ここに来た記念にぬいぐるみでもお土産に買つて帰るかあ…？ペアでもいいよ…』

また美咲の手を取り、繫ぎ直した。

悲しそうな顔をしていた美咲はチラシとショーの方を見て諦めたのか、またオレの方を向いて笑顔になつた。

『うん…！！ぬいぐるみ買いに行くーーー…』

元気な美咲に戻つた。

そつか…この恋は1ヶ月の約束だもんな…

今度は…無い…か…

美咲の言葉が頭から離れなかつた。

お土産売り場に行くと美咲はどのぬいぐるみにしようか散々迷っていた。何個もぬいぐるみを手に取つては戻しての繰り返しだつた。そんな美咲を見ていると可愛くて仕方がなかつた。

結局、ショーケースが見れなかつたイルカのぬいぐるみに決めていた。なぜそれに決めたか聞くと、“幸せになれるイルカ”というキャラクチフレーズを見て選んだと言う。

オレはイルカのぬいぐるみを2つ手に取つてレジに並んだ。お土産売り場も少し混んでいた。美咲はレジの横にあるキー ホルダーを見ている。レジ待ちの間、オレは後ろにもいっぱい人が並んできたから、先に美咲を店の外に出してゆつたりしたスペースで待つように言った。

少し待ち順番が来ると、さつき美咲が見てたキー ホルダーも一緒に入れてもらつた。美咲の喜ぶ顔想像出来た。

会計はすぐに終わり、オレは急いで美咲の所に行つた。

水族館は広くて結構歩いた。

お昼も過ぎお腹も空いてきたから、併設しているレストランで昼ご飯を食べる事にした。

メニューを見て、美咲はすぐに決めた。オレは優柔不断でなかなか決めれないから美咲が2番目に食べたい物を選んでもらつてそれを注文した。

料理が運ばれてくると、美咲の皿の上には魚のフライ。そしてオレの皿の上にはエビフライが乗っていた。
さつきまで元気に泳ぎまくっていた魚達がが衣にくるまれて出でてきた。

オレは美咲と目が合うと笑ってしまった。

『何でこれにしたの?』『こいつら、さつき見たよね?』

笑ながら言った。

『だつて、メニューの中で一番食べたかったから!』

美咲も笑ながら応えた。

流石、美咲だな。と思いながら料理を口に運んだ。料理はとても美味しかった。目の前には笑顔で口いっぱいに頬張っている美咲がいる。きっと美咲と一緒にから美味しいんだろうなあと思った。

帰りは少し遠回りをして帰った。帰りの車の中も美咲は元気についてぱいで、今度のデートプランを考えていた。

『来週は、動物園行きたい!!!! 美咲、動物触れんけど!!!!』

『動物嫌いなの?』

『うん…ちよつと苦手ー』

そんな会話をしながら来週のデートプランが決まった。美咲は何で

あまり好きでもない動物園に行きたがるのか分からなかつた。

美咲は実家に住んでいるから、早めに帰らないといけない。そういう所はやつぱり子どもで可愛かつた。

20時頃、朝迎えに行つたコンビニまで帰つてきた。隅の方に車を止め、もう少しだけ美咲と話した。今日はずっと一緒にいたのに、まだそばにいたかった。

オレは今日買つたぬいぐるみを思い出し、美咲に渡した。美咲はすぐにお袋から開けると嬉しそうに手に取つていて。そして底のほうから小さいキーホルダーを見つけるとびっくりした顔でオレを見て、今日一番の笑顔で喜んでいた。

美咲の笑顔は本当に可愛い。

『タクちゃん。今日は本当にありがとう！…めっちゃ楽しかつたよーーーカッコ良いタクちゃんとトーートが出来て、美咲は幸せだなあーー来週も楽しもうねっ！…』

車から出ようとした時に、振り返つて美咲が言つた。

『オレも楽しかつたよ。ありがとう。』

素直な気持ちを伝えた。

『タクちゃん…

美咲とタクちゃんつて今はカップルだよねえ？…だったら…帰る前にちよつとだけ…キスしてもいい？』

美咲はいつも突然言つてくる。ちよつと照れているようだつた。

『うん…』

オレはそつと美咲をそつと引き寄せキスをした。美咲の唇はとても柔らかかつた。目をつむると、一瞬時間が止まつたような気がした。

そしてまた目を開けると、目の前には可愛い美咲がいてとても嬉しそうにじつちを見ていた。

『ありがとうーーー！タクちゃん大好きだよーじゃあ、美咲は帰るね！バイバーイ』

美咲は笑顔で車から降りた。何度も振り返りながら美咲は家に帰つて行つた。

オレは美咲の後ろ姿が見えなくなるなるを確認して、自宅へ車を走らせた。

家に着くといつものようにソファードドロドロした。するとケータイが鳴り美咲からメールが届いた。

『タクちゃんーーー今日は運転お疲れ様です。明日からまたお仕事だねえー。頑張れる？？今日は早く寝て疲れを取つてねー今日は本当にありがとうございましたーーーーーーおやすみっ』

オレは返信しようと思つていたが、疲れてそのまま寝てしまつた。

月曜日が始まり、朝が来た。

またいつものように朝からバタバタとして仕事に向かった。今日は美咲にメールを送ろうと早めに家を出た。美咲はオレが早めに出た事が分かつたかの様に、会社に着くと同時にメールが来た。

『タクちゃんおはようー。昨日は楽しかったから今週一週間めんどくさい学校頑張れそーだよーー！（笑）タクちゃんもお仕事頑張つてね！ いつてらっしゃい。タクちゃん大好きだよーー』

昨日の笑った美咲が思い出された。

『おはよう。美咲は疲れなかつた？ 昨日はメール返さなくてゴメンな。気が付いたら寝てしまつてた。仕事がんばつてくるよ。美咲もちゃんと勉強しろよ。』

車の中で返信した。

仕事は楽しかつたが、今はもう一つ楽しみが増えた。あれほど女には興味がなかつたオレが、美咲と出会つて変わつた感じがした。

さつきメールを送つたかと思つと、またケータイが鳴つた。ピンク色に光つている。

『はあい！勉強頑張る！…今週も日曜日が楽しみだねっ！…』

美咲は返信が早かつた。

オレは小さな工場に務めているのだが、今の時期は忙しくて休みが日曜日しかない。今月は祝日があるが、どうも休めるか微妙な感じだった。美咲にはあまり期待をさせたら可哀想だから、祝日が休みかも知れない事は言わなかつた。

『オレも楽しみ。他にも行きたい所があつたら考えといてな。』

そつ返信すると、オレは仕事に行つた。

今日もたくさん美咲からメールが届いた。教授の詰まらなかつたといつ講義の話しや友達の恋の話し、家での話しや、美咲のドジした話しなど…暇があればメールをしてきた。オレのケータイフォルダは美咲でいっぱいになつてきた。オレはそれを読むのが楽しかつた。

そして仕事から帰ると、“おかえり”というメールが届いた。

寝る前になると美咲から電話が掛かり、美咲の元気な声を聞いて寝た。

こんなメールと電話のやり取りが土曜日まで続いた。

土曜日の朝

『タクちゃんおはようーーー やつと明日はカッコ良いタクちゃんとデートの日だよー。楽しみーーー ラスト一日お仕事頑張ってね！タクちゃん大好きだよーーー』

いつもの様に美咲からメールが届いた。オレはそれを見てから仕事を行くのが日課となっていた。美咲のメールは元気がでてくる。美咲と出会ってから1日があつという間に過ぎて行った。とても楽しくて毎日が充実していた。

職場では先輩から“最近お前変わったな”。女でも出来たのかー？”と冷やかされる。

美咲と出会って10日。まだ10日しかたっていないのに、オレは10日前と比べ物にならないぐらい幸せだった。
仕事もミス無く順調にこなせた。

夜になり、オレはまた美咲と電話をしている。

『明日は動物園デート！楽しみだなあーーー』

美咲は電話の向こうではしゃいでいた。相当楽しみにしていたのだ

るべ。

『で、動物園以外でも行きたい所は見つかった？』

オレは美咲の行きたい場所を聞いてみた。

近くの動物園はそれ程大きくなはない為、すぐに見終わってしまいます。

『んー。買い物行きたいかなあー。服見たいーーー タクちゃん好みに美咲を変身させて欲しいなあーーー』

『分かった。でも変身しなくても今の美咲は可愛いよ。』

「ちょっとオレらしくないクサイ台詞を言ってみた。

『本物…？？ありがとう。嬉しい…！！でも、タクちゃんカッコ良いのに、美咲は子どもっぽいから…タクちゃんに釣り合つてない…美咲ね、タクちゃんの事が大好きだからもつと可愛いくなりたいの！』

聞いていると恥ずかしかった。

美咲はオレの事をどう思っているんだろう…美咲の中でオレは相当カッコ良くなっている様だった。
しかし、そう思ってくれているのは嬉しかった。

『ははは…分かったよ。ありがとう。じゃあ、明日は買い物も行こうな。また朝9時にコンビニに迎えに行くからーゆっくり寝ろよ。おやすみ。』

またあのコンビニで待ち合わせをして電話を切った。

デート

朝になりケータイの鳴る音で田が覚めた。今日はアラームをしなくても美咲が起こしてくれると言つたので美咲のモーニングホールで目覚めた。

朝から美咲の声が聞けて笑顔になれた。

オレの支度はすぐに終わり、家を出た。

動物園に行くのは何年振りだらうか…
車の中で動物園までのナビをセットした。そして車を待ち合わせのコンビニに向かって走らせた。

少し早めに着いたが、美咲の方が先にコンビニにいた。美咲はオレの車を見つけると手を振つて近づいてきた。

『おはよっ。ちょっとでも早くタクちゃんに会いたかったから、早めに家を出ちゃった…』

そう言いながら車に乗ってきた。今日の美咲も可愛かつた。
そして、またジュースを2つ持つていた。

『今日のデートも楽しみだねえ…はい。今日は美咲と一緒にジュー
ース。お揃いだよー』

オレに渡してくれた。

『ジュークお揃いかあ。ありがとう！オレがオレンジジューク好きなん知つとつたん？』

美咲がくれたジュークはオレの好きなオレンジジュークだった。

『本当？知らんかったー。美咲も好きだつたから選んだんだけど、たつた今もつと好きになつたー！』

美咲は笑っていた。

動物園までは1時間からないぐらいの距離だつた。車の中で美咲はオレにたくさん質問をしてきた。その中で今までの彼女の事も聞いてきた。オレは美咲の過去なんて気にならないが、女は気にするのどうか。美咲は最後に一言『美咲がタクちゃんの1番の彼女になりたいな』と言つた。その言い方がとても可愛かつた。

いろいろ話しているうちに動物園に着いた。

今日は車を降りた所から美咲と手を繋いだ。美咲は嬉しそうに微笑みながらオレの手を握つていた。

園内はそれほど多くの人は来ていなかつた。入るとすぐにキリンがいた。隣にはゾウもいて餌を食べていた。動物園の主役達が出迎えてくれている。

少し歩くとサルがたくさんいる檻があつた。オレと美咲が檻の側を通るとサルが暴れ出し、大きな音をたてながら柵から柵へと飛び移つた。

美咲はびっくりしてオレの手を強く握つた。

『うわあ……怖い……。』

本当に怖がっていた。動物嫌いって言つてたっけ……オレは思い出した。

『大丈夫だよ。檻から出て来ないから。』

オレは笑ながら言つた。

『うん……。』

やつぱり美咲はビビつていた。

また少し歩くと今度は鳥がたくさんいた。入り口でオウムが『コンニチハ。コンニチハ。』と喋っていた。鳥は怖くなかったのか、美咲は『面白いー！』と喜んでいた。ふれあい広場もあってウサギやモルモットが触れたが、美咲は首を横に振つていたので見るだけで通り過ぎた。その後もペンギンやカワウソ、ヤギや羊、クマやバクなどたくさんの動物を見て歩いた。可愛い動物は美咲も笑顔で見ていた。美咲は動物園でもデジカメで写真をいっぱい撮つていた。そして最後にライオンとトラがいる所に行つた。トラは寝ていてほとんど動かなかつたが、ライオンはグルグルと檻の中を歩いていた。ライオンがこっちを向く度、美咲は固まり驚いていた。

『大丈夫だよ。』

怖がっている美咲を抱き寄せた。

『うん……ありがとう……。』

美咲はオレの方を見てまた笑つた。
美咲の笑顔がオレは好きだつた。

動物園はそれ程大きくなかったから1時間もしないうちに全て見終わつた。最初の場所に戻ると美咲がソフトクリームが食べたいと言つたからソフトクリームを買ってベンチに座つた。美味しそうにソフトクリームを食べてた美咲はやっぱり幼くて可愛かつた。

『美咲は動物が好きじゃないので動物園に行きたかったん?』

オレは聞いてみた。

園内では楽しそうにはしゃいでいたが、怖そうにもしてたし本当は楽しめなかつたんじやないかと思つた。

『ん…動物はそれ程好きじゃなかつたけど、タクちゃんと来てみたかつたの!だつてずっと手を繋いでいれるし、怖くてもタクちゃんが側にいてくれるから大丈夫だつたもん!幸せだつたよ。ありがとう!!』

美咲は笑顔でそう言つと、またソフトクリームを食べ始めた。美咲はオレと一緒にたらどうでも良かつた。オレと一緒にいたかつたんだと思つた。

動物園を後にすると、今度はショッピングセンターに向かつて車を走らせた。

どんな服を買おうか美咲は考えながら、オレにも好みを聞いてきた。
特別、オレ好みにしなくとも今のままで充分なのに…そう思つた

が、美咲は一緒に買い物をするところを楽しんでいた。

ショッピングセンターに着くと、丁度お昼になり先にご飯を食べる事にした。日曜日だからどの店もいっぱいで、結局空いていたのが回転寿司だつたからそこにした。

お腹もいっぱいになつて、美咲の服を探した。オレは車の中で『スカートが似合うと思うよ。』と言つたから美咲はスカートを見ていた。何件か見たが美咲の気に入つた服が無かつたのか、美咲は何も買わず店から出てきた。

『良いのが無かつたのか？別にオレが言つたスカートじゃ無くとも、美咲が欲しいと思った服を買えばいいんで？』

美咲に言つた。

『「うん…気に入ったのが無かつたから今日はやめておく…』

少し落ち込んでいるようだつた。

元気の無い美咲の手を繋いで歩いていると、アクセサリー屋さんが目に入つてきた。

『じゃあ、またお揃いの物でも買うか？美咲、オレとお揃い好きだろ？』

そう言って美咲をお店に連れて入つた。お店の中はガラスケースに入つたアクセサリーがいっぱいあつた。

アクセサリーを見ていると店員がやつてきた。

『いらっしゃいませ。ようしかつたらお取りいたしますね。ぜひ付けてみてください。』

そう言つと美咲が見ていたリングを出してくれた。

『サイズはピッタリですね。彼女さんによく似合つていますよ！』

店員は何でも似合つと言つから当てにならない。けど、リングを付けた美咲は可愛かった。

『ん……でも……やっぱりリングはいらないや……ずっと一緒につけているものがいいから……あつ、ネックレスがイイかなあ……そしたらタクちゃんもお仕事の時も付けるよね？』

美咲は向ひにあつたネックレスを指差した。

『そうだな。オレもネックレスならずつと付けていられる。仕事中も大丈夫だよ。』

そう言つてネックレスを見るにした。美咲はどれにしようか迷つていた。ネックレスも種類がいっぱいあつて、店員にいろいろ出してもらひながらリングの付いたネックレスに決めた。

これならオレでも付けるつて、美咲が選んでくれた。美咲にはちよつと男っぽいデザインだつたが、美咲はすごく気に入つたみたいで嬉しそうにしていた。

時間もたち、そろそろ帰らないと家に着くのが遅くなる時間になつた。

車の中では、美咲はネックレスを付けてはしゃいでいた。そして信号待ちで止まっていると、オレの分も出して、オレに付けてくれた。

『これでずっとタクちゃんと一緒でいられるー。ありがとう！…タクちゃん大好きっ』

美咲がオレに抱きついてきた。

喜んでる美咲をみると、オレもすく嬉しかったし幸せだった。

今日もあつといつ間に過ぎて行き、やがて美咲と別れる時間がきた。

今日も最後に美咲とキスをして別れた。

15日の木曜日。

朝早く美咲からメールが届いた。

『おはよう。まだ起きてない？早く起きてーーー遅刻するよ。今日はハーフ記念だよ。美咲達は1ヶ月しか付き合わないから記念日がないじゃん？だから今日が半月の記念日ーーー！美咲と付き合つてくれてありがとうーー今、美咲はとっても幸せだよ。タクちゃん大好きーーーー』

…そつかあ…記念日無いもんな…
美咲からのメールを見てちょっと切なくなつた。

オレはだんだん約束なんてどうでも良くなつた。もつと美咲の笑顔を見ていたいし、美咲と一緒にいたい。美咲といろんな所に行きたい。そう思った。美咲と一緒にいてオレはだんだん美咲の事を好きになつていつた。

けど、美咲には今言わないでおこうと思つた。1ヶ月経つて、美咲がまだオレの事を好きでいてくれたらオレから告白して美咲を驚かせてやるつもりと思つた。

『おひ。おはよう。ちゃんと起きてるつてーーーハーフ記念日かあ。分かつた。今日仕事が早く終わつたら飯でも食べに行くか？お祝いしよう。』

定時に終わらせて急いで帰つて仕度をしたら18時には美咲を迎えた。

に行けると思った。

『やつたあーーー…楽しみにしてるね。でもお仕事が忙しかったらいよ。ありがとうーー』

美咲からの優しいメールが届いた。

今日の仕事は忙しかったが何とか早めに終わらせる事が出来た。昼間にレストランの予約もした。

18時ギリギリになるだろうか…急いで帰つて仕度をして、家を出た。

いつものコンビニに着くとやつぱり10分ほど遅刻をした。けど、美咲はすく嬉しそうな顔をして待つていてくれた。

『タクちゃんだあーーーー平日にも会えるなんて幸せっ！…時間を作ってくれてありがとうございます。』

美咲の首にはオレとお揃いのネックレスが光っていた。

『ごめん。遅くなつて。今日は大丈夫なん?』

『うん。大丈夫！友達どじ飯食べてくるつて言つたからーーー』

美咲は親を上手く胡麻化して来たみたいだった。

車に乗ると予約をしたレストランに向かつた。

レストランでは2人で簡単な記念日のコースを食べてお祝いをした。

美咲はいつもの笑顔でずっとオレを見ていた。いろんな話してもして会話が弾んだ。

『美咲ねー、本当は内緒なんだけど、タクちゃんにだけ秘密教えてあげる。聞きたい?』

『うん。何?』

美咲が突然言い出した。美咲が突然いう事はビックリする事だから、心の中で何を言つのかドキドキしていた。

『美咲ね…』

実は魔法が使えるの。でも人生の中でだつた1回しか使えないの。』

美咲は変な事を言い出した。オレはドキドキして損をしたと思った。美咲は変わっていると思つていたけど、やつぱりちょっと子どもっぽかつた。

『えつ? ははは…そつかあ。で、何に使うの?』

ちょっとバカにして笑つたら、美咲はほっぺを膨らましていた。

『まだ使わないもん! ってか、本当だよ? 本当に魔法使えるもん!』

『分かつた。分かつた。誰も信じてないって言つてないじゃん! じゃあ… オレも内緒にしてたけど… オレも魔法使えるよ。美咲と一緒にだけ!』

オレはちゅうと意地悪を言つてみた。

『嘘だーーー！タクちゃんは絶対使えないもん。魔法を使えるのは
美咲だけだもん！』

美咲はムキになつてそつ言つた。

『本当だよ。美咲だけが知つてるオレの秘密。美咲と一緒に。』

オレがそう言つと、美咲は笑つていした。美咲は“オレと一緒に”とい
う言葉が好きな様だつた。

そんな変な会話をしながら、食事を済ませ美咲をコンビニまで送つ
た。

車の中で美咲は次の“トーントーの話”をしてきた。

『ねえーねえー、今週も美咲とトーントーしてくれる？』

オレの腕を突つきながら言つてきた。

『うん。いいよ。予定は入れてないから。』

運転しながらオレは応えた。

『やつたあー。どこ行こつかなあ？タクちゃん、どこに連れて行つ
てくれる？』

『美咲の好きな場所に連れて行ってやるよ。オレはビードもイイよ。』

『

『ん……じゃあ、遊園地行きたい！思い切ってユニークに行く？』

美咲は目を輝かせながら言った。

『イイねぇ。ユニーク！行った事ないから一緒に行くか。』

オレが返事をすると美咲はすぐ喜んでいた。

『でも3日後か…祝日も重なってるからきっと多いと思つよ…それにどうせ行くなら色々調べて行きたいし。ユニークは来週にしない？美咲も乗りたいものとか観たいものとか調べといて…！』

『うん…分かった…美咲、めっちゃ楽しみにしてるから…タクちゃんとユニークなんて夢みたいー！』

美咲は、来週になつた事はちょっと落ち込んでいたが、一緒にユニークに行けると嬉しがつていた。

車はいつものコンビニに着き、今週のトートはゆっくり考える事にして今日は別れる事にした。
時間も遅くなつたので、すぐに美咲は帰つていつた。

メール

次の日も朝からメールは届いた。

『おはようー！昨日はありがとう。行きたい所見つけたよー！！また夜にモシモシしようねっ！今日もお仕事行つてらっしゃい。タクちゃん大好きだよー』

美咲からのメールを見てオレは仕事を始めた。

仕事中もケータイはピンクに光り、美咲からのメールがたくさん来た。半月過ぎた頃からちょっとずつ淋しそうなメールも届いた。あと何日…とか、もつとそばにいたいな…とか。

でも美咲は美咲から言い出した約束を守るのと頑張つて、『最後は笑顔でお別れするもん』なんてバカなメールも送つて來た。

夜になつてオレはまた美咲と電話をした。毎日電話をしてるのに、毎日違う話をしてとても楽しかつた。美咲の声を聞くとオレは落ち着いて、いつも元気をもらえた。

『そう言えば、デートで行きたい場所つてどーなん?』

『んー海行きたい！』

暑いって言つてももう夏は終わったのに、美咲は海に行きたいと言つた。

『何で?』

またドライブでも行きたいのかと思つてオレは聞いてみた。

『美咲のね、待ち受けが砂浜の写真になつてゐるんだけど、キレイだからタクちゃんとも行きたいの?』

そつと言えば美咲のディスプレイにはキレイな海が写つていただけふと思つ出した。

『わかった。海か? そんなにキレイな海は無いかもしれんで? ちよつと遠いかも知れんけど、行つてみるか?』

オレは頭の中で、この辺りの海を浮かべて一番キレイな海に連れて行つてやひひと思つた。

『やつたあーーー!』『真いつぱい撮つとーーー。』

こつもの喜んでこる美咲がいた。

今日も1時間程話をして電話を切つた。

《おはよう。 明日はスタート! 楽しみだなーーー タクちゃん

あと一日お仕事頑張つてね。大好きだよー！ー。』

また朝が始まった。そしてメールを見てオレは仕事についた。

来週は祝日があるせいか仕事が忙しかった。ほとんど休みなく働いて、気が付けば夕方になっていた。

今日は美咲からのメールがほとんど読めなかつた。ケータイを取つてみると美咲からのメールが6件溜まつていた。

…こんなにメールを送つてくるなんて、美咲も暇だな…そんな事を思いながら、メールを読んだ。オレは美咲からのメールを見ると少し疲れが取れた気がした。

『じめん。やつと仕事終わつたわー。今日はさすがに疲れた！すぐ帰るからまた夜に電話しよくな。』

オレは今日初めてメールを送つた。美咲はオレからメールが来ない事に、少し慣れてきているようだつた。

『タクちゃん、お仕事お疲れ様！！今日は電話しなくていいよ。いつも美咲と電話をしてくれてありがとうーゆっくり休んで明日のデート楽しみにしてるねつ』

すぐに美咲から返信が来た。オレの事を気遣つてくれているメールが嬉しかつた。

『じめんな。ありがとう。じゃあ、9時に迎えに行くからー明日もモーニングホールよろしくー。』

『うん！　美咲の声で起きてね。タクちゃん大好きだよー。』

こんなメールのやり取りをして俺は家に帰った。

ご飯を食べて風呂に入つて、やつとゆつくり出来る時間が出来たが、疲れていたせいかオレは横になつた瞬間寝てしまった。

海

美咲から電話がかかってきた。

今日も朝から元氣いこはいた

『おはよー。わかった。すぐ支度して行くなーー!』

美咲の声で起きたから日覚めが良かつた。

オレは早めに支度を済ませ、待ち合わせ場所のコンビニに向かって車を走らせた。

海があ、遠いけどあそこに行つてみるかあ
運転をしながら行き先を考えていた。

時間より早めに着いたが、美咲の方が先にいて、手を降りながらこつちに近づいて来た。

『おはよう。今日もよろしくお願いします。タクちゃん、いーっぱい楽しもうねー。』

車に乗りながら美咲は笑顔で言つた。

今日も美咲の手にはオレンジジュースが2本あった。オレのと美咲の。オレがこの前好きって言つたからまた買って来たんだなって思うと少し笑えた。そんな美咲が可愛かった。

『よしーー海行くかーーちよつと遠いけど、砂浜のキレイな所に行こひ。』

そう言って車を走らせた。

海までは2時間ぐらいかかった。

島にある砂浜に向かうため何個か橋を渡つた。景色が変わる度、美咲は車の外を眺めながら『スゴーイ！…キレイ！…』とほしゃいでいた。

でも外をみた後はオレの方を向いて『でもタクちゃんみてる方が好きーー！』って言つてきた。

オレは照れながら運転をした。

砂浜に着くと一緒に手を繋いて歩いた。潮が引いていたから、ちよつと遠くまで行けた。

後ろを振り返るとオレと美咲の足跡がずっと続いていた。同じ歩幅で、小さな足跡と大きな足跡がついていた。

『タクちゃん… ひつかひつかとタクちゃんと一緒に歩いて行けたらいいな。』

美咲が立ち止まり真面目な顔で言つた。ちよつと悲しくも見えた。

『うん… 一緒に歩いて行けたらいいな…』

オレは美咲と繋いでいる手に力が入った。けど、それ以上は何も言えなかつた。

オレも心の中では決めていた。

…ずっと美咲と一緒にいたい…
つて。

美咲は1ヶ月の約束を今も信じて、受け入れようと必死のようだつた。

『あ…』めん！…』めん！…

『かくキレイな海をみに来たのに、こんな話したらダメだね！』
！美咲、今とっても幸せだよ！！ありがとう…』

美咲はそう言うとその場にしゃがんだ。そして砂浜にハートをいつぱい描きだした。

『これがタクちゃんへの想いだよーーー！いつぱいあるでしょーーー！』

笑顔でそう言つとオレの方を見た。

美咲の好きだという気持ちはすぐ伝わった。

そして美咲はデジカメを取り出して、一緒に写真を撮ろうと言いました。

手を繋いでいる写真や、砂浜、海、美咲が描いたハート…美咲はいっぱい撮っていた。

しばらく遊んで、近くのレストランで食事をして帰った。

帰りの車の中では来週のコニバ話題で盛り上がった。

『コニバ楽しみー！…美咲、乗りたいものがいつぱいあるから迷つかやうー！…』

美咲はずっと楽しみにしていたのか、手と足をバタバタとさせながら喜んでいた。

『うん。オレも楽しみ！

本を買って一緒に見よつゝまた平日の夜空けのから「飯でも食べながらー。』

『本当ー？？うそうん！…ありがとひ。平日もまた会えるの？幸せー！…』

美咲は興奮しながら言つてきた。

『いいよ。じゃあ、木曜日辺りでも大丈夫？本買つとくからー。』

オレも美咲に会えるのが楽しみだつた。

『やつたあー！…楽しみがまた一つ増えたあー！…

あつ…でも本は美咲が買つてもいい？早く見たいからー。』

『いいよー。じゃあ、どこ行きたいか見といてなー。』

美咲はずっとオレの方を向きながら話している。ずっと笑顔で、ずっと嬉しそうに。オレは運転しながらも美咲の方をチラチラ見ていた。目が合う度、

美咲は『やつぱりタクちゃんカツコイイ!! タクちゃんの笑顔大好きだよ!!』と言っていた。

美咲の笑顔の方がずっと可愛くてオレは大好きなのに、恥ずかしくてなかなか言えなかつた。

行よりも帰りの方がずっと早くで、気が付けばいつものコンビニに着いた。

『今日も楽しかったな。また来週も楽しもうな!!』

オレは美咲の頭を撫でながら言った。

『うん!! 来週…最後のデート…楽しもうね!!』

美咲の声が小さくなつた。美咲の目には涙が溜まつていた。笑顔に振舞つているが、瞬きをしたら涙が流れそつた。

『そんな最後つて言つなよ。もう一生会えないつてわけじゃないんだし!! 深く考えるな。…な? わかつた?』

美咲を抱き寄せた。

『うん…』

オレの胸の中で美咲はうなづいた。

オレは美咲の涙を…初めて見た。

しばらくして美咲は顔をあげた。必死で笑顔を作ってる美咲がいた。オレはそつと美咲にキスをした。

『美咲には笑顔が一番似合ひ』 そつまつと美咲は『もう！…バカ！』と言つて笑つていた。

しばらく話をして、今日は疲れたから早めに解散する事にした。

『じゃあ、またね！…ありがとう。タクちゃん。』

美咲はそつと車から降りた。

そして家に向かつて歩いて帰つていった。

月曜日。

祝日なのにやつぱり仕事が入つて、オレはいつものよつと支度をしている。今まで彼女がいなかつたから祝日出勤でも全然構わなかつたが、今は美咲と一緒にいたいと思った。

そんな事を考えながらいつも時間に家を出て、職場に向かつた。途中、ケータイが光つた。美咲からのメールだ。

『おはよう！祝日のお仕事エライね！…さすがタクちゃん！！次あつた時はいーっぱい褒めてあげるね。だからお仕事頑張つてね！…タクちゃん大好きだよ！』

オレはいつもこのメールで元気をもらひ。美咲からのメールは自然と笑顔になれた。

…よし。頑張るか！…

そう自分に言い聞かせて今日も仕事を頑張った。

涙

次の日も朝からメールが届いた。

『タクちゃん、おはよう！美咲も今日からまた学校だあ……でも今週は3日行つたらお休みだから頑張るねーーー！それに今週はユニバだしつーーー！タクちゃんもお仕事頑張つてねーーー！世界で1番大好きだよーーー！』

美咲からの可愛いメールだった。

『おう。頑張る！美咲もしつかり勉強頑張れよーーー！』

久しぶりにメールを返してオレは仕事に行つた。

仕事中もメールはたくさん届いた。その中に『今日は本を買いに行つてくるね』と書いてあつた。

…オレもそろそろ調べないとな…ふと、ユニバの事が頭に浮かんだ。明後日また美咲に会うからその時までにチケットを取つて新幹線の予約もしようと思つた。

夕方になつて、今日の仕事はいつもより早めに終わつた。また美咲からのメールはいっぱい溜まつていた。

『今ね、本屋だよーーーどれにしようか迷つなあーーーめっちゃ楽しむつーーー早く帰つて読みたいなあーーー！』

タクちゃん、今日もお仕事お疲れ様でした。いい子いい子。また夜に電話しようね！』

メールを見ながらオレは家に帰った。

家に着くと風呂に入つてご飯を食べて、ソファーで「ゴロゴロしながらパソコンをつづいた。いろいろ調べているとあつという間に時間がたつて、気が付いたらいつも美咲と電話をする時間を過ぎていた。オレは慌ててケータイを見た。いつもならメールが来てるはずなのに、美咲からのメールは1通も無かつた。

…本でも夢中で読んでいるのか？美咲は子どもだからな。
…そう思いながら電話をかけてみた。

…プルル…プルル…プルル…

繋がらない。

…風呂でも入っているのか？…

『おーい。何かあった？電話に出ないから心配なんだけど。時間が空いてら連絡してな。』

オレはメールを送つてみた。

しかし、しばらくしても美咲からは何の連絡もなかつた。

…寝てるのかなあ…

オレがパソコンに夢中になつていたせいだと思つた。

何度も電話を掛けたが繋がらず、結局美咲からの連絡も来なかつた。

朝になつたが、美咲からの連絡が無かつたことが気になつてあまり寝れなかつた。

オレはいつものように仕事の支度をして、家を出た。

職場に着いて車の中で美咲からのメールを待つたが来なかつた。時間、ギリギリまでケータイを見ていたけど、ケータイがピンクに光ることはなかつた。

…やっぱり変だ。美咲からメールが来なかつた事はない。…

『おはようー！美咲？何かあつた？

仕事行つてくるなー！美咲も勉強頑張れよー！』

オレはそう送つて仕事に行つた。

昼休憩になつて、すぐにケータイを手に取つた。メールは1通も届いていない。

：メールが来ないって淋しいな。美咲もオレがメール送らないから淋しかつたのかな？もしかしてオレに意地悪でもしてるのか？
いろいろ考えた。

今日の仕事も終わり、結局美咲からのメールは全くなかつた。さすがに心配になつてすぐに電話をした。

… プルル … プルル … プルル …

繋がらない。オレは不安になつて何度も連絡をした。

… プルル … プルル …

『… はい。』

電話が繋がつたかと思うと、男の声がした。

『え…？？誰？？？』のケータイは美咲のだよな？？

よく分からぬが電話に出たのは美咲じゃない事だけは分かつた。

『そうだよ。これは美咲のケータイだよ。』

男が応えた。一瞬、美咲の元カレが出たのかと思つてびっくりした。

『え？？誰お前？？美咲に代わってくれ。』

『…』

何も応えなかつた。

『おいー聞こえてる?ちょっと美咲に変わってくれ。』

オレは少し強じ口調で言つた。

『姉ちゃんはもう電話に出れない。』

…姉ちゃん?…あつ…美咲の弟?…

前に美咲の家族の話しがした時に、弟がいると言つていた事を思い出した。

『え?…何で?..?..』

何で弟が電話を取つているのか分からなかつた。

しばらく沈黙が続き、電話の向こうで弟が泣いているのが聞こえた。

『姉ちゃんは…

昨日…

交通事故で死んだから…

も「電話に出る事が出来ない……』

オレは理解するのに時間がかかった。

『え？？美咲が？？交通事故…？？』

嘘だろ？と思つたが、身体が固まって動かなかつた。

『こつへど』

オレはいろんな事が聞きたかつた。

『昨日…本屋に行つた帰りだつたらしい…詳しい事はまだ聞けてないけど…病気に運ばれた時には…もう…息をしてなかつたみたいで…』

弟は泣きながらこういふ教えてくれた。

…嘘だ…そんな事はない…美咲が死んだ？？

『え…？』

オレの頭の中は真っ白になつた。

昨日までワイワイ話しあっていたのに。昨日までもんなに笑顔でい

たのに。昨日までいっぱいメール来てたのに。昨日まで…

それ以上何を話したか覚えていない。

電話を切つた後も、その場から動けなかつた。

どれくらい時間がたつたのか分からぬが、オレはまだ車の中にいた。

ケータイを手にすると、また美咲からメールが届くんじやないかって何度もセンターに問い合わせをした。もう一度と来る事はないのに…

オレは初めて美咲からのメールを読み返した。毎日欠かさず送つて来たメールは受信フォルダがいっぱいになるほどあつた。当たり前だと思っていたメールは、どれも優しくて美咲らしいメールばかりだつた。オレを元気にさせてくれたり、笑わせてくれたり、励ましてくれるメールばかりだつた。

そしていつも最後に“タクちゃん大好きだよ”って言葉が書かれてあつた。

…オレはまだ大好きだよって言つてないのに…美咲にオレの気持ち

を伝えてないのに…

そう思うと涙が出て来た。
涙が止まらなかつた。

初めて声を出して大泣きをした。

…あれ程楽しみにしてたユーバ、一緒に行くんじやなかつたのかよ
…オレ、約束終わつたら美咲の事本氣で好きになつたから告白する
つもりだつたんだぞ…もつ出来ないじやん…

今の現実と信じたくない気持ちがオレの中で葛藤していた。

オレは今の状況を嘘だと信じ込ませ、
家に向かつて車を走らせることにした。でも、それもすぐにその思
いは解かれ涙が溢れてきた。

やつと家に着いたが何もする氣にもなれず、ただまた美咲から連絡
が来るんじやないかつて待つていた。

いつものソファード、いつものように横になつていたら、またかか
つてくるんじやないかつて…

結局一睡も出来ないまま朝がきた。

仕事には行けそうもないと思い、会社に電話をした。

『…すみません…体調が悪くて…今日は欠勤でお願ひします…

はい…すみません…お願ひします。』

オレは初めて仕事を休んだ。会社の人には淡々と応対されて電話を切られた。何気ない日常の様に。今のオレには不思議でたまらなかつた。

ずっとつけていたテレビのニュースでは、事故の事がしていた。いろんなニュースの中に紛れて、一瞬だけその事に触れられていた。

時間が経つに連れ、オレの頭の中も整理が出来てきた。ただ信じたくないだけで。

ふと見た着信履歴も美咲でいっぱいだった。

このボタンを押したらもう一度美咲の声が聞けるんじゃないかなって…美咲に繋がるんじゃないかなって…そう思った。

オレは戻れるなら戻りたいと何度も願った。

前に美咲に言つていた願いが一つ叶うなら、美咲を生き返らせてほしいと何度も何度も願つた。子ども騙しかも知れないけど、オレには嘘であつてほしいとしか考えられなかつた。

時間ばかりが過ぎ、もう夜になつていた。何もする気にならず、心が空っぽになつていた。

あまり眠れないまま、オレはソファーの上で横になつていた。カーテンの隙間からは日が差していて、朝になつた事が分かつた。

家にいても考える事は美咲の事ばかり…

今日は仕事に行く事にした。

仕事に打ち込むと一瞬でも忘れられるかと思い、支度をして家を出た。

1人でいるのが怖くて会社に付くとすぐに車から降りて工場の中に入つた。工場の中には数人が雑談をしていた。

同僚に 昨日休んだ事を聞かれたが、体調が悪かつただけと言うと、それ以上は聞いて来なかつた。オレの顔色が悪かつたから本当だと思つたのだろう。

仕事が始まり、指示された仕事はこなせたが、空いた時間や休憩の時間は美咲の事を思い出してしまい目頭が熱くなつた。

やつとのおもいで仕事は終わつた。いや…終わらせた。正直、あまり寝ていなし今日の仕事は精神的にも肉体的にもキツかった。

オレは、すぐに車に乗つた。

もう元気が出るメールも届かないと思うと、ため息が出た。オレは仕事中、ケータイはあまり見ない様にしていた。

家までは何とか帰れた。家に着くと、ソファーに倒れ込んだがポケットの中身が邪魔をして、身体が少し痛かつた。

中にはケータイがあつた。ケータイをテーブルに置こうとした時、光つている事に気付いた。

…着信1件…

急いでケータイを開いた。

…美咲…

美咲から着信がきていた。オレはソファーから飛び起きて、慌てて掛け直した。

…やっぱり嘘だつたんだ。良かった。また美咲の声が聞ける。…

そんな期待をした。

プルル…プルル…

『…』

『もしもし？美咲？？生きてるの？？びっくりせんないよー。』

『…』

『美咲？…もしもし？』

『「」めんなさい…僕です。

今日、姉ちゃんの葬式が終わりました…』

電話に出たのは弟だった。

『え…？』

また現実に引き戻された。やっぱり本当だった。

『あの日に持っていたカバンの中からノートが出てきて…
きっと姉ちゃんの彼氏に宛てた手紙が…挟まっていたんですね…』

『…』

オレは言葉が出なかつた。

『渡したいのですが、ダメですか？』

『…え？ オレ宛て…？

うん…

わかった。取りに行く。』

一瞬、どうしようか迷つたが、美咲がオレに宛ててくれた手紙を取りに行く事にした。いつもの場所まで。いつも美咲が手を振つて待つていてくれるコンビニまで。

時間は9時を回っていた。

色々な事を考えオレは運転をした。ついこの前までは美咲をどこに連れて行つてやろうかと考えながら走つていた道が、今は長く遠く感じた。

コンビニに着くと男が1人、コンビニの前に立つていた。小さな紙袋を持っている。

オレは車を停めて、男の所に歩いて行つた。

『あの…』

オレは男を見ながらゆっくり話しかけた。

『はい。美咲の弟です。』

男の顔には笑顔は無く、すこしく疲れた顔をしていた。

『これ、姉ちゃんの…渡したかったものだと思いつの…』

そう言つと、袋を差し出された。

オレは美咲の弟の田を見ながら受け取った。弟は美咲と同じ優しい田をしていた。

オレが受け取ると同時に、じゃあ…と美咲の弟はオレの前から立ち去り、歩き出した。弟も突然の出来事で気持ちの整理が出来ていらない様だった。オレと同じ…いや、オレ以上に辛い思いをしていふと分かつた。

『ちょっと待つて。』

…わざわざありがと。』

オレは何も言葉が浮かんで来なかつた。でも、わざわざ届けてくれた事に感謝をした。また少しでも美咲を感じる事が出来るなら、オレは幸せだつた。

一瞬、弟の足は止まつたが、また歩いて帰つて行つた。

オレは美咲の弟が見えなくなるまでずっと小さくなつていぐ背中を見ていた。美咲がいつも帰るときみたいに。

車に乗り込むと、少し紙袋の中身が気になつたが先に家に帰る事にした。正直、開けるのが怖かつた。美咲からの最後のメッセージだと思つとなかなか開けられず、紙袋を抱えたまま車を走らせた。

家に着くと、紙袋をテーブルの上に置きしばらくそれを眺めていた。いろんな事がオレの頭の中に浮かんできた。そのどれもが美咲への想いだった。

オレはふーっと深い溜め息をして紙袋を手に取つた。中を覗くと手のひらサイズの小さなノートと手紙が入つてあつた。

ノートはパラパラとめくると、まるでアルバムかの様にオレと「データ」に行つた写真がいっぱい貼られてあつて、その一つ一つに美咲らしい可愛い字でコメントが書かれてあつた。

車の中の写真や、水族館、動物園の写真、この前行つた海の写真までいっぱい貼つてあつた。そのほとんどは笑顔のオレが写つっていた。

“ ジャーン！！ 美咲の大好きな彼氏！！ ”

“ ここの手が離れないとイイなあ！！ ”

“ ずっとこの手が離れないとイイなあ！！ ”

“初ツーショット写真！…タクちゃんカッコ良い！…”

そんなコメントがいっぱい書かれてあった。

途中には日記みたいなものが書いてあって、読んでいると美咲が近くにいるみたいで涙が溢れてきた。

オレとのデートがどれほど楽しくて、また、次のデートもどれだけ楽しみにしていたかが美咲なりの言葉で書かれてあった。

オレはゆっくり時間をかけて1ページずつ読んでいった。

もう一つ袋に入っていた手紙は“タクちゃんへ”と書いてあって、封筒は中身がいっぱい詰まっているのか少し分厚くノリでしっかりと止められていた。美咲の家族も開けていないようだった。

オレは手紙を手に取ったが、開けるのはまた今度にして、ソファに倒れこんだ。これを開けてしまつたら本当に最後のような気がして怖かった。

昨日よりも気持ちは軽くなつたような気がしたが、やっぱり涙は自然に溢れてきた。

オレは気がついたら眠っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418y/>

約束

2011年11月29日22時47分発行